特集

ようこそ！パラアートギャラリーまさきへ

ここは役場？美術館？
庁舎内にたくさんのアートが飾られました。
10月から始まった「パラアートギャラリーまさき」
について紹介します。

パラアートが庁舎内に

庁舎内に飾られたのは、町内の就労継続支援B型事業所（※）に通う障がいのある人たちが制作した作品。絵画、手芸作品など全部で85点もの作品があります。

作品を展示することで、障がいのある人の制作意欲を高め、社会参加を図ることを目的として始まった「パラアートギャラリーまさき」。展示期間を定めず、役場の開庁時間内なら、いつでも誰でも作品を鑑賞することができます。

※一般企業に雇用されることが困難で、雇用契約に基づく就労が困難である人に対して、就労の機会の提供や生産活動の機会の提供を行う事業所のこと。

作品は購入なども可能

展示されている作品は、購入やリースが可能です。気に入った作品の近くにあるQRコードをスマートフォンなどで読み取るほか、電話で事業所にお問い合わせください。

次のページから、展示作品の制作者を紹介します。

磨き抜かれた感性で理想をかなえるデジタルアート

就労継続支援B型事業所
「Loistaa」利用者
嶋（しま） 俊介（しゅんすけ）さん

▲「道端のコスモス」

▲「お庭の水蓮」

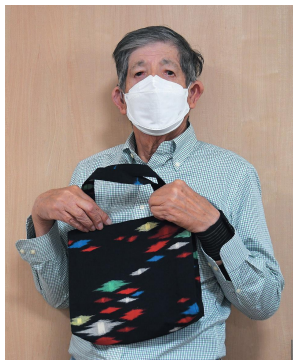
嶋俊介さんの作品は、パソコンやタブレットなどを使って制作する「デジタルアート」です。

嶋さんが、まず用意するのは写真。その写真をベースに「こんな景色だったらいいな」と考えながら、花を増やしたり、水面に映る風景を加えたり―。とても緻密な作業で、どの作品も嶋さんならではのセンスが光っています。

以前は、建築物の完成予想図を描いていた嶋さん。その経験を生かしつつ、「妻のサポートをするため、そして何より自分の障がいには、絵の具ではなく、電源やスリープで簡単に制作を再開できるスタイルが合っている」と話します。

好きな音楽を聴きながら、嶋さん自らが心地よい気分で制作した作品の数々。「『こんな作品が自分の部屋にあったらいいなぁ』と感じながら見てほしい」とほほ笑む嶋さん。「AIを使った制作もしてみたい」と新たな目標を掲げています。今後も自分に合ったスタイルで制作活動を行い、多くの人を魅了することでしょう。

ミシンの使い手による丁寧な縫製が魅力の手芸作品



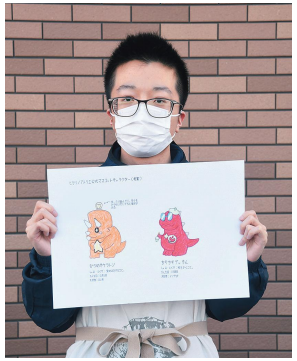
就労継続支援B型事業所
「かめ」利用者
伊井（いい） 修一（しゅういち）さん

「かめ」では、利用者が協力してティッシュカバーや手提げかばんなどの手芸作品を制作しています。

材料のほとんどは、家庭で着なくなった着物。糸をほどき、アイロンをかけて、反物にします。その後は、ミシンの使い手、伊井修一さんの出番。作品のサイズ、ポケットなどのデザインや布（裏地）の組み合わせを考えてミシンで縫います。「カーブを縫うときや、柔らかい生地、硬い生地を縫うときは苦労する」と話す伊井さん。作品の中には、硬い着物の帯をリサイクルして時間をかけて制作したものもあります。

伊井さんは、本や販売されている商品を見るなどして、独学で手芸を習得しました。気になる商品を見つけると、指を広げてサイズを測ることも―。「手に取ってもらえるような作品作りにこだわっている」とほほ笑み、勉強熱心な伊井さんが制作する作品は、丁寧な縫製が魅力です。「これからは、流行を取り入れ、機能性を重視した作品にも挑戦したい」と意気込み、みんなで協力して新たな作品を生み出し続けます。

恐竜博士現る！
大好きな恐竜の魅力を伝える



就労継続支援Ｂ型事業所
「ヒカリのアトリエ」利用者
金林（かねばやし） 青空（はるたか）さん

金林青空さんが絵を描き始めたのは、2歳のころ。幼いころから入退院が多く、室内で遊ぶことが多かった青空さんは、テレビの映像や絵本など、自分が見たものをそのまま描くのが得意でした。

そんな青空さんが恐竜に出合ったのは、小学校3年生のころ。学校の図書館にあった本を見て、恐竜が大好きに―。それからは、家でも学校でも恐竜の図鑑をよく読むようになり、恐竜についてどんどん知識を深めていきました。今では、図鑑を見なくても恐竜が描けるまでになっています。「一番好きなのはティラノサウルス。歯がかっこいい」と目を輝かせる青空さん。絵を描くときには欠かせないエプロンとアームカバーを身に着け、毎日4時間ほどかけて一つの作品を仕上げます。

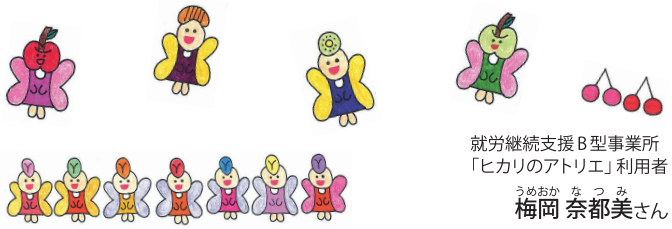
▲ 集中して作品を仕上げる

カラーペン、色鉛筆や水彩絵の具を使用して描かれた作品は、ユーモアあふれるかわいらしいものから、シックでかっこいいものまでさまざま。テレビや本、家族旅行など日常の中から得たアイデアを制作に生かします。恐竜それぞれの特徴を捉えて描かれた作品は、恐竜に詳しい青空さんにしか描けない作品です。

「これからも恐竜を描いていきたい」と意気込む青空さん。作品を見た多くの人たちを、大好きな恐竜の世界へ招待します。

▲「肉食恐竜の帝国」

色とりどりの思い出がいっぱい
楽しかった記憶を絵で表現



就労継続支援Ｂ型事業所
「ヒカリのアトリエ」利用者
梅岡（うめおか） 奈都美（なつみ）さん

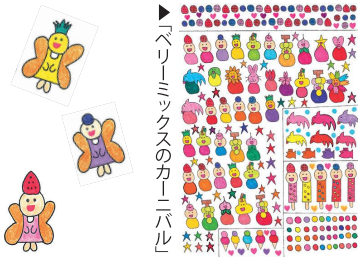
アクリル絵の具や、カラーペンなどで描かれたカラフルで、かわいらしいキャラクターたちがたくさん。それが、梅岡奈都美さんの作品の特徴です。

幼いころから絵を描くのが好きだった奈都美さんは、小学校1年生から絵画教室に通い始めました。母の地津江（ちづえ）さんは、「先生が何でも好きなものを描かせてくれたんです」と振り返り、その体験が現在の制作活動の原点となっています。

オリジナルのキャラクターたちには全て名前を付けている奈都美さん。指さしながら、「これはフルーツのミカン坊や。これは友達のほっぺちゃんです」と、数えきれないほどのキャラクターを紹介します。作品のテーマは、「フルーツ」「水族館」「おすし」などさまざま。これらは、家族で外出したときに奈都美さんが気に入ったものです。奈都美さんの日課は、完成した作品をスマートフォンで撮影し、地津江さんに送信すること。二人のスマートフォンには、楽しい思い出がいっぱいです。作品の「カラフルなキラキラ」に注目してほしいと目を輝かせる奈都美さん。おしゃべりも大好きですが、奈都美さんにとって、絵は自分を表現する大切なものです。

「今は、アイスクリーム屋さんを描いています」とほほ笑む奈都美さん。これからも楽しい思い出を多くの人に届けます。

▲ お気に入りの制作スペース



▶「ベリーミックスのカーニバル」

「パラアートギャラリーまさき」には、
障がいのある人たちの思いが込められた作品が
たくさんあります。
ぜひ、松前町役場へ来て
たくさんの思いを感じてください。
何か得られるものが、きっとあるはずです。

インクルーシヴ・松山 ヒカリのアトリエ
管理者　**青山（あおやま） 俊子（としこ）さん**

interview　アートは社会とつながるヒカリ

日頃から一生懸命制作している作品を多くの皆さんに見ていただきたいと思っています。

言葉でコミュニケーションをとるのが難しい利用者さんにとって、これらの作品は自分の分身です。作品を通じて社会とつながることができています。作品を見て、いろいろな人がいろいろな世界で頑張っているということを知ってもらえたら―。

これからも大好きなこの松前町で、利用者さんと地域に溶け込んで、一緒に町を盛り上げていきたいと思っています。